

春ニ亘リテ強震ナツキ」震害ノ最モ甚ダシカリシハ、明治三
十七年四月二十四日及ビ同年十一月六日ノ兩地震ニシテ第十
編及ビ第十一編ニ詳述スルガ如シ、三十六年九月七日臺東ノ
強震ハ其ノ餘震非常ニ夥多ナリキ（第十四編參照）

一三 地鳴

官報ニ掲載セル測候所ノ地震報告中地鳴アリ

タル旨ヲ附記セルハ左ノ四回ノ地震ナリ

(1) 臺北 明治三十二年三月二十九日午後六時十四分四

十九秒微震（局部地震）

(2) 全
全 四月二十四日午前一時九分二十

五秒微震（全上）

(3) 臺東 全 三十五年十一月二十八日午前九時五十六
分零秒輕震（非局部地震）

(4) 澎湖島 全 三十七年十一月六日午前四時二十五分二
十七秒強震（全上）

若シ精密ニ注意シタランニハ、地鳴ヲ伴ヘル地震ノ數ハ、右

ノ如ク單ニ數回ノミニ止ラズシテ、非常ニ多カリシナラン、近

頃宮城縣、埼玉縣等ノ管内ニ關スル地震報告ヲ調査シタルニ

山地即チ岩石地方ニ於テハ地震前ニ地鳴ヲ聞クコト特ニ夥シ
キヲ認メタリ、臺灣諸測候所中ニテモ、例之バ臺北、澎湖島、臺

東ノ如キハ地鳴アルコト比較的多カルベシト思ハル」上記ノ

内第(4)ノ地震ハ即チ三十七年ノ大地震ニシテ震原附近ニ於テ
ハ何處ニテモ地鳴ヲ聞キタルナリ

一四 測候所地震觀測表 本報告ノ終リニ附錄トシテ各測
候所ノ地震ノ報告ヲ掲載シテ參照トス

第三編 地震度數ノ一年中及ビ一 日中ノ變化

一五 一年中ノ分布 第一〇章ニ與ヘタル臺北及ビ臺南ノ

地震回數表ニ基キ、一ヶ年十二ヶ月ノ地震平均ノ分布ヲ調査
スルニ次表ノ如シ、臺北及ビ臺南ニ於ケル地震觀測ハ、全ク
普通地震計ニ依レルモノナレバ、頗ル正確ノ結果ナルノミナ
ラズ、地震ノ回數モ、他ノ測候所ヨリ多キヲ以テ、特ニ此等
兩所ノ觀測ヲ取リタリ

一年中ノ地震分布(平均數)

月	一月	二月	三月	四月
	臺北	臺南	臺北	臺南
八、三	三、一回	二、一回	四、六	五、九
四、〇	一、八回	三、四回	春 四 五月	三月
六月	二〇、八回	一一、四回		

五月	六、六	四、〇	夏	七月	一三、六	七、一
六月	四、四	二、〇	八	月		
七月	四、一	二、六				
八月	五、一	二、五	秋	九月		
九月	六、〇	一、七	十	月		
十月	四、〇	一、九	冬	十二月		
十一月	六、〇	二、九	一	月		
十二月	六、〇	二、九	三	月		
			一、三、七			
			五、八			

即チ臺北ノ一ヶ年中地震回數ノ最多ナルハ四月ニシテ 八・三
回ナリ、又最少ナルハ十一月ニシテ一・七回ナリ、其ノ比ハ
四・九ト一ノ割合トナル、臺南ニ於テハ四月及ビ五月ニ最多
ニシテ各々四回、十月ニ最小ニシテ一・一回、其ノ比ハ三・六
ト一ノ割合ナリ「前表ノ結果ヲ第一圖及ビ第二圖ニ圖解トシ
テ示ス、即チ臺北并ニ臺南トモ、地震回數ノ變化ハ、大體ニ
於テ一年中ニ二回ノ最大ト二回ノ最少トアリテ、最大回數ハ
四月及ビ九月ニ現ハレ、最小回數ハ六月乃至七月、并ニ十月
乃至二月ニ現ハル

一年中地震ノ變化ヲ氣壓ノ變化(第三圖)ト比較スルニ、氣壓
ハ六、七、八月ニ最低ニシテ十二、一、二月ニ最高ナリ、即チ大
體ニ於テ、氣壓ノ最高ナルトキト、其ノ最低ナルトキトニ於

テ地震回數ハ最少トナリ、氣壓ノ下降スル時期ト、上昇スル
時期ノ中央ニ於テ、地震回數ハ最多トナル、此ノ關係ハ東京、
岐阜、宇都宮等ニ於ケル地震ノ場合、若クハ有馬鳴動ノ場合
ト相等シキ性質ヲ示スモノナリトス
一六 四季ノ分布　臺北及ビ臺南ニ於ケル地震四季ノ分布
ハ前章ノ表ノ下段ニ示スガ如シ春季ノ平均地震回數ハ三月、
四月、五月ノ月別地震回數ヲ合シテ得タル數ニシテ、夏、秋、冬
季ノ回數モ之ニ準ジテ得タル結果ナリ、臺北ニテハ春季ニ最
多ニシテ二〇・八回、秋季ニ最少ニシテ一一・七圖、其ノ比ハ
一・八ト一トノ割合ナリ、又臺南ニテハ同ク春季ニ最多ニシテ
一一・四回、冬季ニ最少ニシテ五・八回、其比ハ二ト一トノ割
合ナリ、尙ホ四季ノ變化ノ大體ノ趨勢ハ圖解(第四圖及ビ第
五圖)ニテ明瞭ナルベシ」臺北及ビ臺南ニ於ケル地震四季ノ
分布ハ東京、熊本、長野、名古屋、岐阜、津、沼津、和歌山、
新潟等ト同様ノ性質ヲ示ス、本委員ガ震災豫防調査會報告第
三十號ニ論ジタル(甲)地方ト稱セル部類ニ屬シ、大體ニ於テ
陸地内ニ發セル地震ヲ多ク感ズルモノナリトス
一七 一日中ノ變化　次表ニ明治三十一年ヨリ三十六年迄
ニ、臺北ニ於テ地震計ヲ以テ觀測セル三百九十七回ノ地震ヲ
一日中二十四時間ニ配布セル結果ヲ示ス

此ノ如ク每一時間合計ノ地震回數ハ、午後五時ト六時ノ間ニ
最多ニシテ二十四回、又午後十時ト十一時トノ間ニ最少ニシ
テ十回、其ノ比ハ二・四ト一トノ割合トナル」一日中二十四時
間ノ地震ノ配布ハ第六圖ニ、又毎三時間ノ配布ハ第七圖ニ
變化ヲ第八圖ニ示ス」第六圖ニ依レバ臺北ニ於ケル氣壓ノ一日中ノ
變

	時刻		(明治)年
	午前	午後	
合計	零時ヨリ一時 一時ヨリ二時 二時ヨリ三時 三時ヨリ四時 四時ヨリ五時 五時ヨリ六時 六時ヨリ七時 七時ヨリ八時 八時ヨリ九時 九時ヨリ十時 十時ヨリ十一時 十一時ヨリ十二時	午後 零時ヨリ一時 一時ヨリ二時 二時ヨリ三時 三時ヨリ四時 四時ヨリ五時 五時ヨリ六時 六時ヨリ七時 七時ヨリ八時 八時ヨリ九時 九時ヨリ十時 十時ヨリ十一時 十一時ヨリ十二時	三十一年 三十二年 三十三年 三十四年 三十五年 三十六年 合計 每三時間回數
九二	二二五 四二三 六七五 一四三 二三五 六五二 五二四 五四五		回
七二	五五二 二五四 四一三 二四七 六一四 三一五 三〇二 二〇一		回
四五	五〇一 二一二 三一一 二三一 二二一 ○五二 一二〇 二五一		回
四五	二一一 二三五 二一一 二二一 ○二三 三三〇 一一四 二一二		回
一〇〇	三一三 二五二 六二五 九三四 六四七 四六二 五五四 四二六		回
四三	一一二 ○三〇 三一二 三二三 四三二 二一二 一二二 二〇二		回
三九七	一一一 二一一 二二一 二一一 二一二 一二一 一二一 一二一 八〇四 二九六 四三七 九八九 ○四二 八一三 六二六 七二七		回
三九七	四二 四七 五四 五六 五六 五二 四四 四六		回

化ハ極メテ不規則ナルガ如クナレドモ、自ラ多少ノ特點アリテ、平均ノ位置ヲ通ジテ画セル曲線ハ一日中ニ四回ノ最高ト、四回ノ最低トヲ示ス、殊ニ四回ノ最低ハ規則正シク六時間ヲ距テ、現ハル即チ午前四時ト五時トノ間、同ク十時ト十一時ノ間、午後四時ト五時トノ間、同ク十時ト十一時トノ間ニシテ、其ノ時刻ハ午前ト午後ト同一ナリ」震災豫防調査會報告第三十號ニ内地諸測候所ニテ觀測セル地震ニ就キ其一日中ノ分布ヲ論述セルガ、地方ニ依リテ、(イ)一日中二回ノ最多數ト二回ノ最少數ヲ示スモノ(即チ十二時間ノ週期ヲ有スルモノ)、(ロ)三回ノ最多數ト三回ノ最少數ヲ示スモノ(即チ八時間ノ週期ヲ有スルモノ)、(ハ)四回ノ最多數ト四回ノ最少數ヲ示スモノ(即チ六時間ノ週期ヲ有スルモノ)、(ニ)六回ノ最多數ト六回ノ最少數ヲ示スモノ(即チ四時間ノ週期ヲ有スルモノ)トノ四種類アリ、就中東京ノ如キハハノ部類ニ屬ス、臺北モ亦同一部類ニ屬スルモノトス

氣壓トノ大體ノ關係ヲ見ルニ(第七圖、第八圖參照)、氣壓ガ

最高ナルトキ、并ニ其ノ最低ナルトキニハ、地震回數ハ最少ニシテ、氣壓ノ上昇スル時間、並ニ其ノ下降スル時間ノ中央ニ於テ、地震回數ハ最多ナルガ如シ、之レ一年中ノ變化ノ際ニ於テ得タル結果ト相等シキ性質ヲ示スモノナルベシ

本章ニ記述セル所ハ臺北ニテ觀測セル普通地震ニ關スルモノナレバ、他ノ測候所ニ關スル地震一日中ノ分布トハ異ルコトモ有ルベシ、且ツ普通小地震ニ就キテ得タル結果ハ、素ヨリ直チニ大地震ニ適用スペキモノニハ非ズト知ルベシ、例之バ日本本土ニ關スル大地震ハ一年中夏期、殊ニ七、八兩月ニ最多ナレドモ、同ク普通小地震トハ一年中ノ分布ニ於アハ全ク反對ナリトス(震災豫防調査會報告第二十六號參照)

第四編 臺南測候所地震驗測

一八 普通地震計驗測 普通地震計ヲ以テ地震ヲ驗測セル記象紙ヲ調査スルハ、地震研究上最モ必要ナル事項ノ一ニシテ、之ニ依リテ、各觀測地ニ於ケル震動ノ振幅、振動期、方向等即チ局部ニ固有ニシテ震率トモ稱スペキモノヲ測定スルヲ得テ、震原地ノ推定、地震ノ原因ノ調査、耐震構造上ノ参考トナルナリ

臺灣諸測候所中、最多數ノ地震ヲ地震計ニ依リテ驗測セルハ、臺南測候所ニシテ、其ノ記錄モ亦良好ノモノ多キヲ以テ、爰ニハ臺南記錄ニ就キテノミ調査シ、他ノ測候所(臺北、基隆及ヒ澎湖島)ニ關スル記錄ハ異日更メテ調査セン冀望ナリ